

8) Symptomatic pineal cyst の1例

岡崎 秀子・富川 勝 (厚生連中央総合)
新井田広仁・青木 広市 (病院脳神経外科)

画像上 incidental に松果体部嚢胞を認めることはしばしば経験されるが、症状を呈するものは稀である。今回、閉塞性水頭症により発症した1例を経験したので報告する。症例は57才女性、頭重感を主訴に受診したが、軽度の知能低下以外、特に異常を認めなかった。画像上、側脳室は著明に拡大していた。mass は CT ではやや CSF より高い density を示したが、wall は enhance されず、metrizamide CT では、mass への RI 移行は見られなかった。MRI では T1, T2 とほぼ同様で、CSF より若干高信号であり、quadrigeminal plate の上方に位置した mass により、中脳水道は閉塞されていた。Gd により、薄く平滑な wall が enhance された。6月1日、cyst を亜全摘した。これまでに報告された症例25例と比較しつつ、symptomatic pineal cyst の臨床像の特徴や、画像上鑑別すべき疾患について考察する。今回の症例は、我々が調べ得た範囲では、最高齢の症例であった。

9) Fibrous dysplasia の1例

富川 勝・岡崎 秀子 (厚生連中央総合)
新井田広仁・青木 広市 (病院脳神経外科)

incidental に見つかった比較的めずらしいと考えられる右前頭蓋底の fibrous dysplasia の1例を報告した。症例は68才の男性で頭痛を主訴に来院され神経学的には異常認めなかったが CT にて右前頭蓋底の著明な骨肥硬化像を指摘された。MRI では T₁, T₂ 強調像共 HSI と LSI が斑点状に混在しており、Gd-DTPA にて不均一にエンハンスされた。骨シンチにて同部に高度の RI の集積を認めた。以上より fibrous dysplasia と考えたが ostema, ossifying fibroma, osteosarcoma, metastatic tumor との鑑別を要すると思われ、特に metastatic tumor との画像上の鑑別は難かしく、組織確認のため open biopsy を施行した。結果は fibrous dysplasia であった。以上に、多少の文献的考察を加え報告した。

10) てんかん原性病変の画像診断

田村 彰・亀山 茂樹
長谷川 彰・本田 吉穂
山崎 英俊・川口 正 (新潟大学脳神経)
田中 隆一 (外科)

難治性てんかんの原因としては、腫瘍や血管障害など多彩であるが、今回我々はそのなかで脳の形成異常が原因と考えられた難治性てんかんの症例について報告した。

1988年から1993年までの間に該当する症例は5例あった。内訳は、Pachygyria 1例、Polygyria 1例、Hypomelanosis of Ito 1例、Dysembrioplastic Neuroepithelial Tumor 2例であった。従来原因不明とされてきた難治性てんかんの中にこれら脳の形成異常の症例が含まれている可能性があり確実な診断が望まれる。それには MRI, 特に PD Image が有用の事が多いようであった。

てんかんの患者には MRI を積極的に行って、これらの器質的疾患を除外診断する必要がある。

11) 後頭蓋窩 pacchionian body の画像所見

岡本浩一郎・伊藤 寿介 (新潟大学歯科)
登木口 進 (放射線科)
古澤 哲哉・山本 貴子 (同放射線科)

Pacchionian body (arachnoid granulation, クモ膜顆粒) は脳脊髄液を静脈洞に還流する解剖学的構造物であり、上矢状洞近傍の頭蓋冠内面に小さな陥凹性変化をきたすことが知られている。一方小脳表面にも存在し、後頭骨に限局性骨菲薄化をきたすことがある。今回我々は病理組織学的証明はなされていないが、特徴的な解剖学的部位や画像所見からクモ膜顆粒と考えられた6例を報告した。症例は59~83歳の高齢女性。CT では内板~板間層に、更に外板に達する正中近傍の限局性骨欠損であり、周囲に反応性骨変化は認められなかった。MRI では脳脊髄液と等信号を示し、Gd 投与にても造影されなかった。臨床上病的変化との鑑別が重要であるが、小脳や周囲脳槽に異常を認めず、クモ膜顆粒の診断は可能と考えられた。

II. 特別講演

脳ドックにおける Angiography
—IA-DSA から MRA へ—

新さっぽろ脳神経外科病院院長
中川 俊 男 先生